

# 身近な食用野生動植物の重要性 — タイ・ロイエット県の例をもとに—

## 1. はじめに

茨城県宍塚の里山事例でもわかるとおり、日本でも身近な野生生物の利用は長く行われてきた。現在では春の山菜、秋のきのこ採りとといった趣向程度の採集になっているが、広くインドシナの農山村においては、現在でも野生動植物の利用が日常行われており、生活に重要な位置を占めている。里山の保全について考えるとき、主たる生業でも、二次的自然環境に棲む希 野生生物でもない、身近な食用野生植物や昆虫、水辺の小動物などについても考慮されなければならない。



タイ ロイエット県

## 2. 野生動植物の利用状況

食用植物にはツボクサ、ヨザキスイレン、コナギ、ソリザヤノキなど多数あり、タイ中部地域で 120 種以上が挙げられている。昆虫ではタガメ、コオロギ、バッタ類、カメムシ、セミ、タケムシなど、水生動物では雑魚類のほかに両生類、水生昆虫、など多数が挙げられる。採取場所は芝原 2004 によると、田での採集が最も多く、林野が続き、屋敷地、小川沼などすべて身近な場所で行われるとしている。土地区分でいうと、ほとんどが集落周辺の私有地で採取されている。これらの野生生物は人に採集されるまでは無主物でオープン・アクセスとされている。



食用野生動植物

上：水辺の生物、ゲンゴロウの幼虫、ヤゴ、オタマジャクシなど(ラオス 2007 年)

下：野生植物、クワレシダ、キバナオモダカなど(タイ 2008 年)

(撮影 自然研 市河三英)

## 3. 食用野生動植物の重要性

これらの野生動植物を含む非木材林産物こそが地域住民にとって重要との指摘がある。住民も野生動植物採集が生存の維持に不可欠だと認識しているが、それは、野生動植物採集が短時間でほぼ確実に現物あるいは現金所得を得られる活動である上に、現金支出を減らす点にある(芝原)。

出典：自然研インドシナ調査 2007-2008 年及び、芝原真紀, 2004, 野生動植物採集と公共林野利用—タイ王国東北部ロイエット県の天水稲作農村の事例— 東南アジア研究 42 巻 3 号 p354-377., ウィッセース, 1999 中部タイの地場野菜, タイ伝統医療財団